

雍正硃批諭旨索引稿について

小野和子

東洋史研究会では、かつて本誌誌上に四回にわたって「雍正時代史研究」の特集を組み、一九八六年にはこれらを合冊にして、『雍正時代の研究』（同朋舎）を編纂して刊行した。これらに掲載された研究論文は、京都大學人文科學研究所の共同研究「雍正硃批諭旨の研究」班の研究成果の一部でもあったが、同研究班では、基礎作業として、同書の索引カードの作成をも同時に進めてきていて、一時期、中断はあったものの、昨八五年、ようやく一應の完成をみた。但しあまりにも大部なものである爲、當面、公刊する豫定はない。そこでこのカードを十枚ずつ一ページにおさめてゼロックス複寫したものを二部作成し、さらにそれを五部増刷し『雍正硃批諭旨索引稿』（約二〇〇〇ページ）として、人文科學研究所から別記の機關に寄贈していただくことにした。

このカードは、内容索引としても、語彙索引としても研究者の役に立つであろう。とくに制度史や社會經濟史に関する語彙は豊富であるから、工具書としての意味をも持つであろう。しかし書物として活字にし公刊するのではなく、増刷した五部を各研究機關に贈るのであるから、やはりこの際、ゼロックス版の所在を、研究者の方

々に知っていただく必要がある。また利用していただくに當って索引作成の経過や方法についてもあらかじめ理解しておいていただくことがのぞましい。そこで本會會長宮崎市定・副會長谷川道雄兩先生と御相談した結果、ゼロックス版の巻頭においた左記の縁起と凡例および索引従事者氏名を本誌誌上に發表させていただくことにした（なおゼロックス版では、縁起の漢文譯〔清水茂京大教授譯〕が附せられている）。

編輯委員會は、これらの掲載を快く諒承して下さった。ただ本誌では、これを収録するのに必ずしも適當な欄がなかったのだが、廣い意味ではやはり研究動向の一端を紹介するものであると考え、本欄に収録していただいた。

人文科學研究所雍正硃批諭旨索引縁起

清朝三百年の歴史を理解するの管輅は雍正一代の治績にあり、而して雍正朝史料の精粹は獨り硃批諭旨一書を推す。雍正の在位は僅かに十三年に止まると雖も、その意義の重、且つ要なるを考うれば、康熙乾隆の各六十年なるを駕してその上に出ず。清朝をして清朝たらしめ、元祚短命の轍を踏まざらしめしは、職ばら雍正創制の卓偉なるに由るなくんばあらず。雍正時期の資料浩瀚、雲海も畜ならず。然れども寶訓實錄は一面の言、片見の辭、會典條例は官衙吏牘の殘紙のみ。硃批諭旨に至りては君臣往復上下研磨の論、地方督撫の賢否より、晴雨の時應、糧價の高低、生民の休戚に關する所、瞭として指掌の如し。古今東西、何れの處にか此の書あらんや。安部健夫教授の人文科學研究所にあるや、夙に此に思ひを致すあり、雍正硃批諭旨研究班を組織せんとして、之を余に謀る。即ち昭和二

十四年、共に檄を傳えて同志を鳩め、應ずる者十餘名を得たり。毎週金曜午後を以て輪讀の期と定め、讀むに従つて語句を卡片に寫すを課す。一齣の義訓、苟しくも疑點あれば反復討論して、日の戻くを知らず、昔者吾友、嘗て斯に従事せり、の概ありき。拮据十年、文部省科學研究費の補助を得、採録せる卡片數萬枚に達す。如んともする無し、昭和三十四年安部君忽焉として逝世す。余その後を受け、代つて主幹すること六年、亦た引年退休す。次いで緒を承けしは、小野川秀美、佐伯富兩教授たり。圖らずも昭和四十五年、班の解散に遇い、事業中絶し、卡片九萬枚空しく匣裏に眠る。然れども講讀全く廢したるには非ず。佐伯君は文學部における演習において硃批諷旨研究を續け、昭和五十一年に至り、人文科學研究所小野和子助教授は、明清時代の政治と社會班を組織して、班員と共に索引作成を續行し、特に昭和五十六・八・三島海雲財團の獎勵費を得、また井上進助手の協力を受け、黽勉事に當り、採録する卡片三萬枚、舊と合して十二萬枚、涉獵はほ全きに近し。即ち副本二部を作り以て衆人の閱覽に便にせんとする。この事業創設以來時に弛張あるも、前後年を閱する三十五年、當初の青壯、今鬢髮既に斑白、或いは遺曆、或いは古稀、余も亦た頽然として老いたり。告竣の報を得て欣快、舊時を憶いて縁起を述べ、以て後世に傳えんと庶幾う。倘し或いは遺漏あらんか、之が拾補は更に百年を俟たんとする。

昭和六十年三月

宮崎市定記す。

凡 例

昨一九八五年三月、『雍正硃批諷旨』の索引カードをようやく整理し終えた。

現在、京都大學人文科學研究所に保管されている同カードは、總枚數にして十二萬を越えるという大量のものである。今回、これをゼロックスによつて複寫し、『雍正硃批諷旨索引稿』として五部を、國內外の左記の場所に寄贈することになった。

北京 人民大學清史研究所

臺北 故宮博物院

東京 東洋文庫

京都 京都大學文學部

京都大學人文科學研究所

四半世紀にも及ぼうという長期間、人文科學研究所内外の多數の研究者の方々の御協力を得て進められてきたこの事業を、このような形で、利用していただけるようになったことを、この上なく喜ばしく思っている。この機会に、この索引カードが具體的にどのようなように作成されてきたかを説明し、それとの關連に於いて凡例を述べて、この索引を利用せられる研究者の方々の便宜に供したい。

(一) 雍正硃批諷旨研究班では、この書物を冒頭から讀んでゆくという形をとらなかつた。同書の石印本六十冊を、十名乃至十一名の研究者が、五冊乃至十冊ずつ分擔し、毎回三名分を、順次、會讀していった。會讀の底本としたのは、人文科學研究所の木活字本である(宮崎市定先生が、殿版を入手され、文學部に入れられたのは研究會發足後數年たったのであった)。擔當者は、あら

はじめ、擔當分の奏摺を讀んでおいて會讀が終つて後、以下の順序で、索引カードとして必要な項目を指摘する。

(1) 先ず、夫れぞれの奏摺について、全體のテーマとなつてゐる項目を選定する。例えば、關稅、耗羨、人事などである。項目名は必らずしも、その奏摺に出てくる言葉でなくても、奏摺の内容を表わすものであればよい。これらの項目については、カードの見出し項目の下に、波線~~~~を下につけることによつて、これが、奏摺全體のテーマであることを示している。

(2) 次に夫れぞれの奏摺を、その内容によつて、或いは長さによつて、數行乃至十行程度の文段にくぎり、各文段のテーマをなしている項目を選定する。同一テーマの長い文章が續く時は、關稅 a、關稅 b の如く、a、b、c を以て示す。この項目については、この文段の全文をカードに筆寫した。このカードを、そのまま、史料として利用できるようにする爲である。しかし、今回のゼロックス複寫に當つては、複寫の際の技術上の問題から、カードの裏面を省略せざるを得なかつた。

また索引作成の後半期に入つてからは、作業を迅速に進める爲に、内容の全文を筆寫することをせず、文章の最初の二字と最後の二字のみを書き、中間の文章を省略して點線でつないだ。一九六五年、臺北文源書局から影印本が刊行され、當該項目の所在さえ確認できれば、比較的容易に、原文に當ることが可能になつたからである。

(3) さらに、右の文段に出てくる語彙のうち、必要な項目とその前後の文章を、三十程度にくぎつてカードに採録した。この語彙が、どのような文章の脈絡のなかに出てくるかを示す爲で

ある。この文章の下段に、(↓□□□)とあるのは、「□□□を見よ」という意味である。□□□はこの文章の出でくる文段であつて、この項目のカードを見れば、より詳しい説明が得られるはずである。

(二) カードには、奏摺を差出した人物の官職と姓名、上奏の年月日、奏摺の關係する省分(以上、右上の欄)及び當該項目の所在を示す函、冊、葉、表裏、行數(以上、左下の欄)が記されている。所在を示す欄の、「版」は、人文科學研究所所藏の木活字本、「石」は、石印本の意味である。つまり、木活字本と石印本の二つのテキストについて所在を知ることが出来る(殿版の場合は木活字本に準じる)。この場合、特に注意されたいのは、この葉、表裏、行數が、項目として採つた語彙そのものの所在を示すものでなく、その説明文の冒頭の文字の所在を示すものであることである。語彙そのものは、次行、次々行、あるいは次の葉に出てくることも多い。

(三) カードの排列は、項目の、第一字の五十音順によつた。音を同じくした場合は、畫數順によつてゐる。第一字が同じ場合は、第二字のそれによつてゐる。音は大體に於いて漢音に従ひ、必らずしも慣用音にはよつてゐない。檢索の場合には、檢字表によつてカードナンバーを確認の上、必要な項目を採し出されるのが便利であらう。

(四) カードの排列を終えて後、ゼロックス複寫によつて、『索引稿』の底本となるものを作成したが、この様に、カードを排列することによつて始めて排列順序の若干の誤りや混亂に氣付いたものがある。原カードはむしろ正しい位置に排列しなおしたが、ゼロッ

クスの方は、全體に影響を與えて、位置の變更が技術的に困難なので、當該のカードを削除した上、最後の補遺に収録した。

四 項目の選定については、研究會の席上、検討が行なわれたが、夫れぞれの擔當者の意向をも反映し、また、採録の時期によつても繁簡まちまちで、必ずしも統一されてはいない。研究會の當初には、意味不明、もしくは要注意ということでもカードに採録しながら、読み進むうちに問題が解決し、採録しなくなつたものもある。今回の複寫に當つて、これらを統一したり、削除したりすることは敢えてしなかつた。一見、不必要と思われるものも、亦た役に立つことがあるかも知れぬと思われたからである。したがつて、これはあくまで『索引稿』であつて、今後とも若干の整理や補充を必要としよう。

この大量のカードを作成し、整理、複寫するについては、實に多くの方々の御協力があつた。

カード作成には、ひろく多額の費用を必要としたが、これについては、宮崎市定・安部健夫・佐伯富・小野川秀美・島田虔次・上山春平の各氏と小野和子を代表者とする文部省科學研究費、及び三島海雲記念財團の奨勵金の援助を受けた。またゼロックス複寫本の作成については、梅原郁・狹間直樹兩氏を代表者とする科學研究費及び岩見宏氏を班長とする共同研究「明清時代の國家と社會」班の研究費の割捐を得た。カードの最終整理の段階では、研究所助手濱田正美（現法政大學教授）・同井上進、文學部大學院生利光有紀（現文學部助手）・辻正博・中砂明徳の各氏が、貴重な時間を割いて協力して下さつた。特に誌して感謝したい。

また拼音及び四角號碼によつて檢索できるよう、拼音・四角號碼

と日本漢字音との對照表を附したが、これはもつぱら京都大學大型計算機センター星野聰氏・人文科學研究所勝村哲也氏を中心とする方々の手によつて成つたものである。

最後になつたが、宮崎市定先生は、索引作成について絶えず激勵して下さつたばかりでなく、本索引稿の爲にわざわざ前掲の「雍正硃批諭旨索引緣起」を草して下さつた。この原稿が、三十年も前に研究班の作つた古い「雍正硃批諭旨研究班原稿用紙」に書かれていたことに、私は一種の感動を覺えた。あらためて厚く御禮を申し上げたい。

今日では、北京の中國第一歴史檔案館や臺北の故宮博物院刊の宮中檔など、大量の歴史檔案の利用が可能になつたが、本索引稿が、史料としてのみならず、工具書としても、内外の研究者のお役に立つことを心から願つている。（一九八六年三月三十一日、小野記）

〔附記〕ゼロックス複寫本の凡例は、夫れぞれの項にカード見本を複寫した上で説明してあつたが、本稿では印刷の便宜の爲に削除し、これに伴つて若干文章を改めた。

索引従事者氏名

安部健夫	宮崎市定	小野川秀美
佐伯富	山本隆義	荒木敏一
岡本午一	宮川尙志	日比野丈夫
島田虔次	佐藤圭四郎	塚本俊孝
波多野善大	里井彦七郎	池田俊誠
岩見宏	谷光隆	狩野直禎
小野信爾	勝藤猛	河内良弘

島神金藤近難勝楊中吉森山近
 居戸城田藤波村山川口藤
 一輝正敬新哲啓忠正夫子樹
 康夫篤一治治也樵齊夫夫樹
 鈴木白上衣佐楊大横稻礪小梅寺
 敏西田川竹谷山葉波野原田
 昭紳一早靖合敏裕一郁隆信
 高重植西杉藤小谷狹若堀永惠
 畑松松里村善玉口閒松川田谷
 紘伸喜邦眞新次規直哲英俊
 志司正行彦澄郎郎雄樹寬男正之

(縁起と従事者氏名は、『雍正時代の研究』に既に發表されている。)

濱竺利閑松杉岡秋西Peter 坂西終
 田沙光野浦山野山嶋Colas 出村眞
 正雅有潛正昌元鶴Golas 祥元照幸
 美章紀龍章明子秀泚 伸 伸 照 幸
 井夫萩大森檀河井山島黃長朝
 上馬原澤紀上政裕本田惠島島野
 進進平浩子寬植正子子子超弘浩之
 小福山村北西阪岩足清水鈴愛
 野本根尾村西倉井立水木木宕
 和雅幸尾村村倉井立水木木宕
 子一夫進直かざよ秀樹二美子元